

[授業報告]

樟蔭高校生対象体験講義 話しことばの研究について

大阪樟蔭女子大学 田原広史

はじめに

本学では、平成 11 年度から内部進学対象者（樟蔭高等学校在学学生）に対して、体験講義を開始し、今年で 2 年目を迎えた。ここでは、12 年度の授業のうち、筆者がおこなったものについて報告する。

平成 12 年度の体験講義は、8 月下旬の夏休み中におこなわれた。各学科ごとに 4 コマずつ開講し、内部進学希望者は、この中から希望する学科を中心に 4 つ以上の講義を受けるように指導された。対象となる学年については、今回は変則的に 3 年生に加え、2 年生も対象とした。13 年度以降は、学年を分け、それぞれの学年に応じた形の体験講義をおこなう予定である。

体験講義の目的は、内部進学希望者に各学科のおこなっている授業を体験してもらい、進学にあたってのよりどころとしてもらうことである。筆者の担当は、国文学科の 4 コマのうちの 1 コマ分であった。以下では、講義の具体的報告をおこなう。

講義内容

本講義は、平成 12 年 8 月 24 日の 7・8 限目（14:40～16:10）に 523 教室でおこなわれた。受講者は申込者 27 名中 24 名である。学年の内訳は、2 年生 5 人、3 年生 19 人であった。この講義をおこなうにあたって注意したのは、まず、大学の講義ならではの内容を取りあげた授業をおこなうこと、しかしながら、通常の授業とは異なり、初めて聞く高校生にも十分理解できる内容であること、という二点である。また、日頃受けている授業は 45 分なので、その倍の 90 分という時間を、いかにして飽きさせずに授業をおこなうか、という点にも留意した。したがって、通常の授業とは異なる、特別な授業にならざるを得ず、結果的に準備にかなりの時間を費やした。90 分を飽きさせないために工夫したことは、授業全体を幾つかの部分に分割すること、生徒自身に考えさせ、その結果を筆記させる形をとること、視覚教材を多用することである。

以下では、具体的な講義内容を紹介する。なお、講義中に教材として使用し、後日さらに清書した上でレポートとして提出できる 10 ページ程度の冊子を用意した。本報告の末尾に掲載する。講義でとりあげたテーマ及び時間配分、具体的な内容を以下に示す。

なお、提示については、原則として板書はせずに、プレゼンテーション用ソフトである

パワーポイントを用いておこない、補助的に実物投影機を用いた。パワーポイントの内容については、冊子にもあらかじめ印刷し、レポートを書く際にあらためて確認できるようにした（冊子部分を参照いただきたい）。

はじめに(20分)

国文学科で学ぶこと(カリキュラムの紹介)(20分)

方言桃太郎(授業の紹介)(20分)

おはよう関西(研究の紹介)(20分)

まとめ(10分)

はじめに(14:40～15:00)

冊子を配布し、裏表紙に印刷した座席表（掲載は省略する）にしたがって座るように指示する。起立礼をおこなった後に、簡単に筆者の自己紹介をおこない、一人ずつの名前の読み方を確認しながら出欠をとる。次に、この授業の流れを説明し、導入のために用意した第一の課題、「ことばについて日頃思っていること」について5分程度でまとめるように指示した。

国文学科で学ぶこと(カリキュラムの紹介)(15:00～15:20)

体験講義の目的の一つとして、高校生に大学でおこなう勉強のイメージをつかんでもらうことがあげられる。筆者の講義は国文学科の四種類の講義の一番目にあたり、筆者は教務委員でもあることから、講義の一部を割いて、国文学科のカリキュラムに関わることを簡単に紹介した。

まず、国文学科の大きな特色であるゼミ制度について説明した。国文学科では、2回生の時にゼミを選択し、同じ先生の下で3・4回生と勉強して卒業論文を執筆すること、早期教育という点で、他の大学には見られないユニークなシステムであること、それは卒業論文を最終目標に、4年間有意義な勉強をするための仕組みであること、といった点に力点を置いて紹介した。

次に、国文学科に関わる授業および研究の分野について、語学と文学の二つに大きく分かれること、文学分野はさらに上代・中古・中世・近世・近代、語学分野は現代語・古典語の時代区分が基本になっていることを述べた。授業の形態については、講義・講読・演習の三つに分かれること、高校と違い、それぞれ受講者の人数や授業の進め方が異なることについて説明した。

カリキュラムの構成については、基礎から応用、発展と学年を追って積み上げていくように組み立てられていること、また、具体的にどのような科目が設置されているかについても説明した。

最後に、国文学科に関連する資格について、中学校教諭1種（国語）、高等学校教諭1種（国語・書道）、司書・司書教諭資格、日本語教員資格の四つがあることについても簡単に紹介した。

方言桃太郎(授業の紹介)(15:20～15:40)

分かりやすく、高校生にも興味もてる教材の例として、今年度の音声言語学という授業で使っている、自作の「方言桃太郎データベース」という音声教材を用いて、簡単な作業をさせた。音声言語学とは、ことばの仕組みの中で、音声に関する面をとりあげて深く分析する科目であり、本学で開設している日本語教育科目の中の一つである。この教材はこの授業の導入として利用している。

この教材は、昔話の桃太郎の冒頭部分(一分程度)を、現地で方言に訳した上で朗読してもらい、それを録音した全国44地点の音声を材料としている。これをアドビ社のアクロバットというソフトを用いて、日本地図の上に地点を表し、そこをマウスでクリックすることで、その地点の音声を再生するものである。

この授業では、まず、沖縄県那覇市の朗読について、あらかじめ文字化したものを提示した上で聞かせ、本土のことばといかに違ったものであるかを実感させた。次に、近畿圏の学生にとって日常耳にすることが少ないと思われる東北方言の代表として、青森県五所川原市の朗読をとりあげ、今度は音声だけを聞きながら、それをカタカナで文字化する作業をさせた。話しことばを文字に表すという経験をさせるとともに、東北方言の発音がいかにカタカナで表しにくいかを実感させるためである。

最後に、この教材が音声言語学という授業の中で、どのように位置づけられているか、また音声学という学問とどのように関連するのかといった点を説明した。

おはよう関西(研究の紹介)(15:40～16:00)

最後に、筆者がおこなっている研究の一端を、NHKのニュース番組で放映されたものを使って紹介した。偶然、この研究をおこなっているときに、話者として協力してくれた生徒がその場にいたので、どのような調査だったかを尋ねることから始めた。

そののち、一度全体を通して見せた。冊子にはあらかじめ、番組の流れを示しておいた。示しておいた内容は以下の通りである。

局名	: NHK 1998年12月14日(月) 7:36～7:41
番組名	: おはよう関西
タイトル	: 変わる関西弁

1. 「声(コエ)」のアクセントについて紹介(38秒)
2. 街頭でコエのアクセントを確認(66秒)
3. 大阪樟蔭女子大学日本語研究センター(86秒)
4. 現在の関西弁の2音節名詞のアクセントについて(35秒)
5. 平安時代末期に書かれた漢和辞典について(57秒)
6. 田原の解説(25秒)
7. まとめ(29秒)

全体で5分程度と短い番組なので、さらにもう一度、解説をしながら見せた。研究の意義を説明するとともに、NHK テレビ番組の作成の裏話等を交えながら、CGを用いた技術力の高さ、報道姿勢の問題点等について、筆者の意見を述べた。

まとめ(16:00～16:10)

今回おこなったことをもう一度おさらいし、全体のまとめを述べた。今回の体験講義については、受講した講義の中から一つ選んでレポートを提出することが義務づけられていたので、その点を説明し、本講義に関しては、授業中に使った冊子を完成して提出するように指示した。

おわりに

90分にしては、内容が盛りだくさん過ぎたきらいがあるが、通常の講義で注意している点、工夫している技術等を盛り込み、筆者の力で現在できる最大限の授業ができたのではないかと思う。

特に、彼女たちが大学生となり、学んでいく三年くらい先の授業形態を想定し、パソコンのプレゼンテーションソフトで画面に写しながら説明したり、視聴覚教材であるビデオを利用したり、といった新しい試みを意識的に取り入れたことで、逆に、今後の通常の授業に活かしていくことができると考えている。

当日は、理事長で学長の森眞太郎先生、国文学科の谷垣伊太雄先生も出席していただき、高校生に教えるというだけでなく、同僚に見ていただくという点でも、良い経験をさせてもらった。できれば、高校の先生にも参加していただけると、別の視点生まれ、さらに意義深いものになるのではないかと思う。